

# 言語表現に関する指導の課題

— 高校生の作文分析から —

櫻 本 明 美

## 1. 問題の所在

この十年間を振り返ってみると、日本語の表現に関する書物が相次いで出版され、人々の注目を集めてきたことに思い至る。今、手元にある数冊の書名を挙げてみると、辰濃和男『文章の書き方』、大野晋『日本語練習帳』、中村明『悪文－裏返し文章読本－』、林望『日本語の磨き方』等。これらの中でも『日本語練習帳』<sup>1)</sup>は、帯のことに「練習問題を解きながら日本語の力をやしなう著者六十年の日本語研究から語る習練の手順」とあるように、読者が用意された練習問題に答えながら読み進める構成になっていて、大きな話題を呼んだ。

その背景を考えてみると、一つには、人間関係を結ぶ際に働く日本語の機能低下が挙げられる。いわゆる「若者ことば」が次々と生みだされ、異世代間では意味の通じ合わない言葉が多用されるという状況が続いている。また、パソコンや携帯電話の普及により、文字表現のしかたも変わってきた。このような社会の変化に伴う日本語表現の在り方に、「これでいいのか」という問いかけがなされたと見ることができる。また、教育の面に限ってみると、最近、若い世代の学力低下を問題視する声が高まっている。そのうち日本語の表現に関しては、たとえば川嶋優氏が大学生の学力について次のように具体的な指摘をしている。<sup>2)</sup>

まず、段落がわかっていない。段落って何ですかという質問がある。段落は、小学校三年、四年のときみっちり習うはずで、この両学年を段落学年というのです。ところが、どこか

の学校でそこを通過してしまっているのです。中学、高校でも通過している。だから、いきなり一マス空けなくて書く、段落なし。

氏が述べている通り、確かに段落は小学校中学年段階から学んできたはずである。しかし、この指摘が事実だとすれば、残念ながら文章表現の学習が実生活に生きる実践力として定着したわけではないと考えざるを得ない。

授業時数の削減、総合的な学習の導入などを含む新学習指導要領の完全実施に伴って、今後、子どもたちの学力低下に拍車がかかるのではないかと懸念されている。これからの教育を充実していくためには、各学習活動がどんな学力の向上に資するものであるかを明確にしていく必要がある。たとえば、小学校の総合学習の試行的実践で、学校にゲストティーチャーを招いて話を聞いたり、実際に「〇〇づくり」を体験したりしている。これらの活動を「学力」の向上につなげるとすれば、一つには、その学習活動にかかわる知識・技能を意識化し活用する過程が組み込まれるようにすることである。

この点について、高階玲治氏は、「総合的な学習は固有な学習形態ではあるが、その学習スキルを支えているのは各教科等の基礎・基本なのである。そのスキルが多く身についているかどうかで、課題追究の深さが違ってくる。」<sup>3)</sup>と述べ、基礎・基本の力（「テクニカル・スキル」）として次のような力を挙げている。<sup>4)</sup>

|          |          |           |          |
|----------|----------|-----------|----------|
| 問題を見いだす力 | 話す力・聞く力  |           |          |
| 調べる力     | メモする力    | インタビューする力 |          |
| 情報を集める力  | 情報をまとめる力 | 表現する力     | レポートを書く力 |

これらのうち「調べる力」「情報を集める力」を除けば、すべて「言語表現力」の下位に位置づけられる。つまり、総合的な学習においても、その成否の鍵の一つが言語表現にかかわる能力の形成にあると考えられる。

このことと先の川嶋氏の指摘などを考え合わせると、学力低下が危ぶまれている大学においても、言語表現に資する学力をより確かに身に付けることが強く要請されていると言える。したがって、大学生を対象に、その実態把握に基づいて、言語表現力を磨く指導の内容や方法の具体化が急務である。

## 2. 研究のねらいと方法

平成13年度より、本学でも、上記の問題に対応できる科目が新設された。1年次生を対象とする「日本語表現演習Ⅰ」である。これは、国文学科(通年隔週)、英米学科、児童教育学科(両学科とも前期)に必修科目として開講される。

児童教育学科に限って言えば、対象学生を10クラスに分け、10名の教員が担当することになっている。この学科の学生の多くは、何らかのかたちで教育に携わる道を歩もうという希望を持っているようである。言語表現力は、とりわけそのような学生に強く求められている資質の一つである。それを磨く機会としても、今後、この授業を有効に生かすことを考えなければならない。

さて、この授業のシラバスに記されている目的と活動内容例は、次の通りである。

- |   |
|---|
| (Ⅰ) 漢字の常識や手紙文の書き方、敬語の使い方などの日本語の常識を身につける。<br>(1) 簡単な自己紹介、スピーチの実習<br>(2) 手紙文ならびに敬語の知識の確認と実習<br>(Ⅱ) 10分程度の口頭発表ができる・2000字程度のレポートが作成できる、などの大学生としての言語表現の基礎を身につける。<br>(1) 着想・発想のテクニック(ブレンストー |
|---|

ミングやKJ法)

- |  |
|--|
| (2) 取材や文献検索・アンケートの実際<br>(3) 口頭発表の仕方・レジュメの作り方・視聴覚機材の利用<br>(4) 文章化のテクニック(目次の作成、段落の配置、段落の内部の構成)<br>(5) 原稿用紙の使い方 |
|--|

上記の計画は、3学科共通のものとして作成された。そこで、これをベースとしながら、実際の指導に当たっては、学習者の実態や意欲関心に応じる柔軟な取り組みが望ましい。そのような授業実現に向けて、学習者(この場合は1年次生)の言語表現に関する意識や能力を、せめてその一端なりとも把握すれば、それは授業の具体化のための拠り所になる。

このことをねらいとして、本研究に取り組むにあたり、平成13年度の本学の入学試験(B方式・児童教育学科「国語」)の受験生による350字以内という条件で書かれた課題作文を対象にする。この作文は、「最近の言葉・言語生活における問題点を一つ挙げ、その問題についての考えを明確に具体的に述べよ」という趣旨の出題に答えてのものである。この作文を取り上げたのは、当該の問題文<sup>5)</sup>にある通り話題が日本語に関することであり、大学生にとっての文章表現の技能面での問題点を明らかにすると同時に、この点についての意識のありようを探ることもできると考えたからである。また、この表現の場では、短時間に内容のまとまりをつけた文章化が求められるため、そこには、かなり率直な見方が表れているのではないだろうか。

そこで、それらを幾つかの観点を設定して読み、その分析結果に考察を加える。そうすることで、学習者の側に立って本授業での活動内容に検討を加えることができる。さらに、より有効な授業の具体像に迫ることができるという仮説のもとに、論を進める。

ただし、この問いは全3問中の1問であり、解答の時間配分上からか、中には全く記述していな

かったり途中で終わっていたりするものもあった。  
したがって、それらを除く66点を対象とする。

### 3. 作文を読む ー分析と考察ー

#### (1) 言語生活に関する問題意識

まず、「最近の日本語における問題点」として挙げられた事柄をもとにして、この年代の人たちの日本語に関する問題意識がどういったことに向けられているのかということ把握する。

各作文で中心的な問題として取り上げられている事柄について、計66点（以下、集計結果として示す作文点数は数値のみで表す）を「話し言葉」「書き言葉」「話し言葉、書き言葉の両面」に3分してみた。

その結果は、次の通りである。

|                         |
|-------------------------|
| 「話し言葉」…48（約73%）         |
| 「書き言葉」…8（約12%）          |
| 「話し言葉、書き言葉の両面」…10（約15%） |

ここから、どちらかと言えば「話し言葉」への関心の高さが読み取れる。通常、日常の言語表現のうち「話すこと」は、「書くこと」よりも頻繁に生じる行為である。また、「話し言葉」の特性からみて、現実と「こうありたい」と願う姿とのギャップが大きいからかもしれない。

次に、それらの文章によって、問題と考えられている事柄を整理し、どのような面に目が向けられているのかを捉えてみた。それを次に示す。

#### 〈話し言葉〉

##### ア 具体的事項に着目して

|                 |    |
|-----------------|----|
| ・外来語（省略，多用の傾向）  | 11 |
| ・若者ことば，流行語，造語など | 9  |
| ・敬語やあいさつの言葉     | 9  |
| ・誤用されがちな言葉      | 5  |
| ・ら抜き言葉          | 1  |
| ・語尾を上げる言い方      | 1  |

##### イ 話し手の意識に着目して

|             |    |
|-------------|----|
| ・相手意識の不足    | 11 |
| ・自己の内面磨きと言葉 | 1  |

#### 〈書き言葉〉

|               |   |
|---------------|---|
| ・外来語（省略，多用傾向） | 5 |
| ・漢字使用の減少傾向    | 3 |

#### 〈話し言葉，書き言葉の両面〉

|                   |   |
|-------------------|---|
| ・省略した言葉           | 6 |
| ・言葉に関する知識の不足      | 3 |
| ・国際化が進む中で日本語の確かさを | 1 |

上記の通り、取り上げられた事柄は、かなり多岐にわたっている。

この結果から、高校生ぐらいの年代の人たちが、自らの言語生活を振り返って見たところ、特に、次のような点に問題を見いだしていることが分かる。

- 書き言葉よりも話し言葉に問題が多いと感じていること  
（\* 具体的事項の例は、上記の列挙事項を参照）
- 外来語や流行語を無自覚に多用することへの反省。とりわけ、高齢者とのコミュニケーション上で問題があるのではないかということ
- 敬語をはじめとする言葉づかいが正しく使っているのか、不安を感じるということ
- 言葉の「コミュニケーションを図る」という機能が十分に生かされていないということ

なお、試験問題にある「参考文」は、「外来語をカタカナで短縮して使うことのデメリット」に言及したものである。その文章に触発され、「外来語」に関する記述が多くなったのであろうと推察する。とはいえ、それぞれに自分たちが使っている言葉を具体的に示していて、やはり関心が高いものと判断する。

以上の結果は、日本語表現演習として取り上げる活動内容を選択する際に、学習者の問題意識や関心の実態に立つための拠り所の一つとすることができる。

(2) 文章表現技能面での問題点

次に、この課題作文で、作文力の基礎基本と考えられる力の定着のようすを確かめてみる。この結果によって、本学の場合、入学直後から受講する「日本語表現演習」などで、話し言葉に関する問題はさておき、文章表現面での指導の力点をどこに置くのが適当なのかを明らかにすることができる。また、それまでの学習指導で身につけておくべきであるにもかかわらず、定着しにくい文章表現技能を見分けることになると思う。

ところで、『悪文』の著者中村明氏は「悪文」の条件を幾つかの辞典等をもとに検討している。そのうえで、氏自身は次の2点に分けて意味を説明している。<sup>6)</sup>

- ① 用語・語順・構成などが不適切なため、文章が理解しにくかったり、誤解を招いたり、あいまいになったりする表現。
- ② 表現主体の個性や表現対象の性格などにより必然的に生じた、リズム感とスマートさに欠けた難解な文章。

氏の説明に拠って、ここで分析の対象とする文章から指導の具体的な着眼点を見い出すとすれば、①の意味付けが参考になる。つまり、「用語・語順・構成」に着目してみることである。

また、授業のシラバスに挙げられている基礎的技能も念頭に置いて、本作文から読み取りが可能な次の点について確かめてみることにした。

- ① 誤字、脱字の有無
- ② 段落構成のしかた

以下に、その結果を示し、それぞれに考察を加える。

① 誤字、脱字の有無

全66点中、脱字は皆無であった。殆どが下書き用紙に書いたものを清書して書き上げていたことも、この好結果につながったのではないか。脱字に関しては、読み返したり清書したりすることでほぼ、解消できると考えてもよいのではないだろうか。

通常、誤字は漢字に関する場合が多い。今回対象とした作文は入学試験の解答文ということもあってか、漢字は文章を読む側にとって自然な程度に適宜使われていた。そして、漢字を積極的に使用している割にはそれらの誤字は少なかった。また、1作品に2字以上の誤字が使われているということもなかった。

具体的には、66点中17点(約27%)に同音異字を含む誤字が認められた。参考までに、それらを以下に列挙する。

|                  |               |               |
|------------------|---------------|---------------|
| 尊 <u>嚴</u> →嚴    | 同 <u>士</u> →志 | 点 <u>検</u> →險 |
| 謙 <u>讓</u> 語→讓   | 程 <u>度</u> →定 | 利 <u>用</u> →理 |
| 独 <u>創</u> 的→想   | 状 <u>態</u> →能 | 誤→誤           |
| 冊 <u>子</u> →紙    | 渡 <u>す</u> →渡 | 違和感→異         |
| 高 <u>齡</u> →齡    | 印 <u>象</u> →像 | 私 <u>達</u> →達 |
| 魔がさ <u>す</u> →間  |               |               |
| ※ 下線部が正。矢印右側が誤り。 |               |               |

近年、ワープロや携帯電話などの普及によって、自分の手で文字を書かなくても、苦もなく漢字が打ち出せるようになり、自分の手で書くことも少なくなってきた。それに伴って漢字力の低下が危ぶまれている。

しかし、この結果を見る限りにおいて、現状としては、漢字書字力にこれまでと大きな違いがあるとは考えられず、今のところ取り立てて問題視する状況には至っていないと受けとめる。

② 段落構成のしかた

「段落」に関しては、先に、「大学生に段落意識が欠如している」との川嶋優氏の指摘を紹介した。同様に、中村明氏も前掲書で「段落づくり」に関する1項目を設けている。氏は、やはり「段落分け」がほとんどない文章の書き手に関して、「よく見ると、はじめを一字下げで書いているから、段落という近代の発明を知らないわけではない。途中で興にのって、うっかり書きまくってしまうのだろう。」と、一応は「段落」に関する知識が皆無ではないだろうと筆者の力を想定している。しかし、その知識が実際の場で生かされてい

ない場合、文章の読み手の立場から厳しく批判して、次のように述べている。<sup>7)</sup>

そのすさまじいレポートを読む前に私は考える。改行さえこのしまつだから、まして表現を整える余裕などはなかつただろう。とすれば、さぞ読みにくいにちがいない。これでは内容だってろくに整理されていないだろう。そう考えると、ますます読みたくなくなる。そういう文章は、何が書いてあるかという以前に、字面そのものに悪文の資格がそなわっているのだといっている。

両氏の言葉にあるように、文章表現指導の内容として「段落分け」は重視すべき事項の一つである。この再確認に立って、本項目についての実態を

- |   |           |
|---|-----------|
| ア | 段落分けの有無   |
| イ | 段落相互の関係づけ |
| ウ | 段落意識の有無   |

の3つの角度から確かめる。

#### ア 段落分けの有無

66点のうち65点が「(所定の原稿用紙のマス目は25字×14行) 350字以内で述べよ」という分量上の条件を満たすように、ほぼ14行目で文章を結んでいる。残る1点は300字(12行目)である。

さて、それらの文章で、いわゆる形式段落に分けて書いているかどうかを調べたところ、次のような結果が得られた。

- \* 2以上の段落で構成されている場合は「有」
- それ以外は「無」とする。

|        |                     |
|--------|---------------------|
| 段落分け…有 | 46(約70%)            |
| 無      | 20(約30%) 計66 (100%) |

これぐらいの長さであれば、少なくとも2～3段落で構成するのが望ましい。そうだとすると、全体の約30%が、この条件を満たしていないことになる。この事実は正面から受けとめなければならない問題点の一つを浮き彫りにしている。

そこで、段落分け「有」「無」のそれぞれの場合について、さらに内容の構成まで踏み込んで見てみる必要がある。

#### イ 段落相互の関係づけ

段落分けが「有」の場合について、段落数を確かめ、次の結果が得られた。

|      |           |
|------|-----------|
| 2段落… | 7 (約15%)  |
| 3段落… | 31 (約68%) |
| 4段落… | 7 (約15%)  |
| 5段落… | 1 (約2%)   |
| 計    | 46 (100%) |

まず、2段落構成の場合、各段落の内容から次のような相互関係が読み取れる。

- |   |                           |   |
|---|---------------------------|---|
| a | 話題提示と具体的例示→主張・意見          | 1 |
| b | 話題提示→具体的例示と意見             | 2 |
| c | 具体的例示→一般化と意見              | 1 |
| d | 現状における問題点の具体的指摘→感想と今後への提案 | 3 |

このように内容にまで目を通してみると、2段落構成をとっている場合は、1段落に2つ以上の内容が混在していて、整理が不十分と言わざるを得ない。その意味では、段落を分けて書いてはいるものの、段落構成のさらなる意識化が必要である。

3段落以上で構成されている場合については、「話題(問題)提示→具体的例示→意見・まとめ」の「尾括型」をとっているものがほとんどであった。書き手の側から言えば、全体の論理的な構造を意識しながら展開することができる。読み手の側にとっては、部分部分のまとまりが明確に把握でき筆者の論旨がとらえやすい。このような段落分けをすることの利点が生きたものとなっている。

ただ、この程度の分量で自分の考えを明確にしようとするれば、初めに自分の考えや立場を明確にしたうえで、そのように考える理由を述べるような「頭括型」も有効である。段落意識を表現に具現化できている場合にも、さらに効果的な構成のしかたが選択できるように力を高めることが課題である。

#### ウ 段落意識の有無

次に、段落分けが「無」の場合について若干の考察を加える。

段落分けができていないからといって、必ずしも段落意識に欠けているとは言い切れない。制限された字数内におさめるためにやむなくそうしたのかもしれないし、筆勢を止められなかったのかもしれない。

そこで、この意識の有無を見分けるために、書き出しの一字下げについて確かめた。書き出しを1マス目から始めている場合は、段落意識を持っていないと判断できると考えたからである。この点については、川嶋氏が「いきなり一マス空けないで書く、段落なし」と述べ、中村氏が「よく見ると、はじめを一字下げで書いているから、段落という近代の発明を知らないわけではない」と述べていて、両氏もこのような捉え方をしているようである。<sup>8)</sup>

段落分けが無いのは20点。そのうち、一マス目から書き始めているのは6点あった。これらこそが段落意識に欠けるものと判断するのであれば、それは全体の約9パーセントにあたる。

この事実は、少なくとも学習者（大学生）自身が「段落」の知識理解を何らかの形で確認する機会をもつことの必要性を示唆している。

エ まとめ

以上、三つの角度から段落分けに関する実態を明らかにした。段落意識について「今さらどうして」という感がしないでもない。小学校中学年ぐらいから段落意識は、特に「読むこと」及び「書くこと」の学習指導に適宜取り入れられてきたはずだからである。

しかし、この結果による限り、大学においても、段落構成の指導が必要であると言わざるを得ない。言語表現力の伸長を期するのであれば、段落の意識づけから段落構成の工夫までを視野に入れ、その意味を押さえたうえでの文章構成力の定着を図らなければならない。

#### 4. 授業の具体化を図るために

大学での言語表現学習は、すでに明らかにしてきたような学習者の側がもつ諸問題を克服し、こ

れからの課題解決に向かうように考えられなければならない。そうした授業の具体化に資するために、改めて授業の目標を定めるとすれば、次の2点に置くのが適当ではないか。

- 日常の話し言葉を磨くこと  
(特に、異年代間のコミュニケーション  
の場での言葉遣い)
- 読み手意識、目的意識を明確にした文章  
表現力を高めること

#### (1) 授業計画に活動の具体例を位置づけて

目標達成に向けての具体的な活動として、すでにシラバスに示されている事柄（本論文 p. 110を参照）が生かされるようにすればよいのではないかと考える。

例えば、次のように活動例を組み替え、授業計画に位置づけてみるのが考えられる。

- (1) 「日常の話し言葉を磨くこと」の活動例
  - ア 簡単な自己紹介
  - イ 3分間スピーチ
- (2) 「読み手意識、目的意識を明確にした文章表現力を高める」活動例
  - ア 手紙文（恩師や年長の知人などへの近況報告、依頼やお礼の手紙など）
  - イ 2000字程度のレポート
- (3) 話すことと書くことの総合化による活動例
  - ー 課題設定のもとにー
  - 〈課題追究の過程〉
  - ア 着想、発想のテクニック（ブレinstoryミングやKJ法）
  - イ 取材…インタビュー  
アンケート  
文献検索
  - 〈追究結果のまとめと発表の過程〉
  - ウ 口頭発表のためのレジュメ作成
  - エ 課題に関する10分間程度の口頭発表
  - オ 課題に関するレポート作成
  - 〈発展〉
  - カ 討論会（ディベート）

この計画をさらに具体像に近づけていくために、少しばかり説明を加える。

まず、(1)イについてである。相手意識や敬語表現などに向けられた関心の強さを考え合わせると、授業内容の一つとして、学生同士が聞き合うのであっても、教室以外の場でスピーチを求められる場合を想定して取り組むようにする。たとえば、友人や親戚の人などの結婚披露宴でのスピーチを想定するのである。いわば、教室が模擬結婚披露宴会場になる。こうした場の設定によって、より意欲的実践的な学習展開が可能になるのではないかと考える。

次に、(2)アの「手紙文」は新学習指導要領（平成14年度から実施）小学校「国語」でも、言語活動例として3、4年に挙げられている。つまり、手紙文を書く際に働くのは言語生活の基礎・基本の力であると言ってよい。大学生の場合に限ってみても、たとえば、教育実習を終えた学生には、お世話になった先生方にお礼の手紙を書くよう勧めることがある。その手紙を「どう書いていいのか分からない」と助言を求めてくる学生がいないわけではない。このような、やや改まった手紙の場合、形式的な知識よりも、むしろ敬語の使い方についての質問が多い。これは、今回の分析結果にもあったように、言語表現に関する一つのポイントに挙げられることでもある。

そこで、手紙文を書くという課題で、学習者自身に様々な相手を想定させる。そして、手紙文での言葉遣いに関する迷いを出し合わせる。それらを練習問題として取り組ませ、この面での理解を確かにする。

要するに、手紙文の実作で前述の過程を組み入れ、言語表現上の問題点の克服につなげる好機となるようにしたい。

(2)イは、2000字程度のレポート作成である。この活動の過程では、シラバス（Ⅱ）(4)文章化のテクニック、すなわち必要に応じて段落の意識づけをしたり、段落づくりの意義を再確認したり、段落構成を工夫する力を伸ばしたりする学習を取り入れることになる。

段落のつくりかた、文章構成の工夫に関しては、小学校中学年の国語科説明文教材などに典型が読み取れる。したがって、それらを活用するのは、有効な方法の一つである。

なお、本活動では、字数に目安を設けている。この機会に原稿用紙の使い方に注意を向けておくこともできる。

最後に(3)話すことと書くことの総合化による活動例としたのは、「話すこと」と「書くこと」の力が相俟ってこそ、豊かな言語表現力が高まると考えたからである。

学習者は、自分（場合によってはグループ）で選んだテーマを追究し、その結果をまとめあげ、情報を発信する。この一連の活動を通して、話すこと・書くことを問わず、自ずと様々な形の言語表現を経験することになる。これは、個々の言語表現力を存分に発揮し練り上げていく貴重な機会となるに違いない。

## (2) 活動の意義や方法のメタ認知を

授業計画を充実させるには、活動の工夫が鍵の一つになる。と同時に、各活動の意義や方法を検討したり、自分たちの言語活動を対象化してみる時間の設定もおざりにしてはならない。

この点については、中冽正堯氏による、次のような指摘がある。<sup>9)</sup>

問題は、活動型の授業にあっては、活動そのものにエネルギーを注ぐあまり、その活動の意義やその方法を将来にかけてどう活用していくかのメタ認知までには、往々にして届かない点である。活動が徹底すれば、その意義や方法の次へ向けての活用能力は自ずから身につくとも思われるが、もう一つ受講者内部での客観化（振り返り）が期待される。このことは、小・中・高等学校を通じての「学び方学習」においても不可欠のことである。  
(下線は引用者による)

とりわけ、「話すこと」に関しては、その特性上、メタ認知が難しい。必要に応じてカセットテープやビデオに収め、それを視聴する。また、相互

評価を取り入れるなど、「自己の対象化」に無理のない方法を工夫する必要がある。

(資料) 問題文

## 5. 今後の課題

本学での新科目「日本語表現演習Ⅰ」の開講を機に、言語表現力にかかわる学習者の実態を確かめようとした。その結果、ほんの一端ではあるがそれを明らかにし、授業の具体案の提示につなげることができた。

今後は、具体案に基づく授業を実践する。そして、そこでの学習者の言語表現を捉え、新たな角度からの実態把握も試みる。授業の具体案については、さらに検討を加え、より充実したものにしていかなければならないと考えている。

注

- 1) 大野晋著 岩波新書
- 2) 大野晋 上野健爾 著『学力があぶない』岩波新書 2001.1 p.157
- 3) 高階玲治「総合の学力は学習スキルが大切」『授業研究21』No.528 明治図書 2001.3 p.13
- 4) 注3)に同じ。
- 5) 問題文は、資料として論文末に提示する。
- 6) 中村明『悪文』ちくま新書 1995.5 p.28
- 7) 注6)と同書 p.113
- 8) 本論文pp.112～113を参照。
- 9) 中冽正堯「教師の資質としての言語表現力」『実践国語研究205号』明治図書 2000.3 p.129

(参考)

カタカナが省略されると

私たちは、カタカナをすぐに省略して使います。外来語を短縮することで日本語の語彙を増やすのですね。セクシヤルハラメントがセクハラになってしまいうように。こうなりますと、もともとは別の意味だったカタカナが省略されることで、たまたま同じ、ということが起きます。「リハ」という言葉は、病院では「リハビリテーション」のことで、放送局では「リハーサル」になるといわれます。

これが増えますと、パソコン、マザコン、リモコン、エアコン、ツアコン、ゼネコン、ゼネコンという、同じ「コン」を使うけれど、全部違うもの、ということが起きます。特に「ゼネコン」は、本当は「ゼネラル・コントラクター」(総合請負業)の略なのに、「ゼネラル・コンストラクター」(総合建設業)だという誤解が広がる弊害も生まれています。

こうなりますと、初めて見た文字でも漢字が使われていれば何となく理解できた日本語が、その言葉を知らない人には何のことかわからない、という状況になりつつあります。

(池上彰『日本語の「大疑問」』による)

(神戸親和女子大学2001)